

短編連作「むかし、神
子ありけり」

cotha

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

豊聡耳神子さまにまつわる小さな話を集めた短編集。

本シリーズでは、「神子さまは人間として生まれた時からずっと女の子である」設定です。

神子さまの可能性を広げていくシリーズとなっております。毎回、あらかじめコンセプトを設けてから書いてゆくことになると思います。

扱って欲しいコンセプト等ありましたら、教えて下さると参考になります。（R指定入りそうなものは、本シリーズでは控えていこうと思います。ご了承ください。）

目次

その一	神子さま、はじめてのおつかい	1
その二、	神子さま、大人になるためにが	6
んぼる。		
その三、	ふつうはだいたいこんなふう	
にごす		19

その一 神子さま、はじめてのおつかい

むかしあるところに、豊聡耳神子と呼ばれる、それはそれは賢い娘さんがいらつしやつた。娘さんと言つても、まだ成人の儀を迎える前の、ほんの五、六歳の幼い娘さんであつた。この娘さんは、本当は娘さんなんて呼ぶのは失礼なくらい高貴な方だつたので、以降はただ、神子さまと呼ぶことにする。

神子さまは、とても賢い娘だつた。これから語る五、六歳の頃には、すでに人の言葉を聞いて、言葉の裏の真の意味を理解することができた。心を読める天才児であつた、などとも言われている。

ある時神子さまは、ある…女性にお使いを頼まれた。偉い人なのにどうしてお使いを頼まれるのかと聞かれると、私は答えることができない。もしかしたら、神子さまみたいに小さい子どもがお使いなんてできるわけない。賢いなんて嘘だ、なんて思った悪い大人の陰謀だつたのかもしれない。

お使いの内容はこのようなものだつた。

「大陸にある、不老不死の木の実を持ってきなさい。」

まだ幼い子どもには、あまりに難しすぎるお使いである。だいたい、神子さまの住ま

われる島国から大陸へ渡るのだから一苦勞だ。

それに、これまでも不老不死の木の実を探した人間の記録はあったが、どの人物も見つけることはできなかった。

もちろん神子さまは色んな書物を読んでいたので、そのことを知っていたし、だから「この大人は無理難題を私に押しつけてるんだなあ……」と、ひどく悲しくなった。

しかし、その悪い大人も偉い人だったので、神子さまは逆らうことができず、涙がこぼれないように必死に歯を食いしばりながら、大陸へ向かう船へと乗り込んだ。それでもやっぱり幼い子ども、船の中で誰にも見られないように、こっそり泣いた。

大陸に着いてから帰国するまでの話は省略。簡単に言えば、色々探したけど、やっぱり見つからなかった。それだけである。でも、一生懸命頑張ったのである。本当に一生懸命に頑張ったのである。それは一瞬見ただけですぐ分かるほどで、高貴な方でいらつしやるにも関わらず、色々な所で色々な苦勞をなされたため、すっかり服は汚れ、上等で丈夫な生地で作られていたのにもかかわらず、ほつれはもう数えることができないほど、ひどいものは数力所刃物で突き刺されたように生地がすっかり切れてしまって、神子さまの透けるように美しい肌が覗いてしまっているほどだった。

島国に帰る船の中で、神子さまはまた少し泣いた。でも、泣くよりもっと大切なことがあった。木の実を持って帰ることができなかった理由を、なんとしても考え出さな

ければならなかった。神子さまは健気に考え続けた。

「おや、神子さま。どの面下げて戻つて来たのですか。木の実は見つからなかったと聞きましたか。」

「はい。見つけることができませんでした。というのも、木の実を見つけてしまうと、あなたさまが永遠に人間という大変不便な身体でお過ごしにならないからです。」

確かに、不老不死というものは少し聞けば良いもののように聞こえます。しかし、人は死んでそこで終わりではありません。その後の暮らしと、人間の暮らしとを比べると、明らかにその後の暮らしの方が良いもののように思われます。

私が木の実を探して持つて帰るのは容易いことでした。しかしそうすれば、あなたさまは永遠に人間でなければならぬ。その身の辛いことを想像しますと、涙が溢れ、とてもではありませんが木の実を見つけることなどできなかったのです。」

神子さまのその忠実で賢くて優しい言葉と、本当に泣きはらした後のような目元を見て、悪い大人は納得した。

こうして聡い神子さまは危機を脱したのであった。
めでたしめでたし。

「…これでいいか、布都どの。」

「ああ！これなら太子さまの優しさが溢れていて、賢いことも分かって、おまけに分かりやすい！今忘れられつつある神子さまの偉業を確固たるものとするためにも、こういう文書はやはり必要であろうな！それにしても、屠自古どのは書くことが上手い。我などはどうしても…こう…あれだ、ほら…。」

「言わんでいい。あんたの悪筆はさっきの第一稿見てよーく分かってるから。あれじゃあ何も伝わらん。」

「むー。しかし、話作りは我もなかなかであろう？いかにも実話っぽい！」

「いや…あー、まあ…どーでもいつか。まあ、悪くはないんじゃないの。よく知らん。」

「これで太子さまの人氣がもつともつと上がればいいな！」

「…私は、別に、今のままでも…敵増やしたくないし…」

「なんと！太子さまを支持する者を敵と申すか！何を言う！おぬしやはり裏切り者か！」

「ちつ…違う！私は別にそういうんじゃない」

「じゃあどういわけなのだ！」

「だっ…だから、私は、その…」

「おぬしなぜ顔を赤くする！いや分かった！やはり何か隠し事をしているのだろう！言わんか！何を隠している！何を！」

「やっ…やめろっ…！私は別にやましいことなど隠してはおらぬっ！」

…神靈廟は今日も平和だなあ。こんなふう言い争う二人をこっそり陰で見ながら、私はほのぼのとするのであった。

…うん、屠自古。分かってるよ。あなたの心の声というか欲、全部聞こえてるからね、うん…。

その二、 神子さま、大人になるためにがんばる。

むかしあるところに、神子さまという大変高貴な身分の娘さんがいらつしやつた。だいたい、娘さんという言葉づかいが間違っているというか、より経緯を表したいのなら、せめてお嬢様とでも言ったらどうなのかと思うけれど、まあ前回「娘さん」という言い方をすずでに使ってしまったのだし、それじゃあ「娘さん」で妥協しようじゃないの。今回は、神子さまが成人の儀を迎えた少し後のお話。一応年齢上は大人でありつても、まだどこことなく子どもの無邪気さと無知と純粹さをかねそなえた、魅力たっぷりな神子さまを、どうかお楽しみくださいませね？

真つ暗な室内。何も見えない、普通の人間が聞くことのできる程度の「音」も聞こえない。ただ、何者かが神子さまの口元に、それを押しつけていた。

分かつていた。それを受け入れなければ、彼女は大人になることはできないのだと。そつと口を開き、おそるおそる舌を伸ばす。若々しさ溢れる、みずみずしくて美しい桃色の唇の間から、震える舌がそつと覗いた；が、部屋は真つ暗だったため、誰も彼女の舌も、その悩ましげな表情も、恐れから思わず涙を溢れさせる瞳も、見ることはできなかつた。

「…どうしました、神子さま。さき、早くこれを口に入れるのです。」

そう言う男の声は、普通の人間からしても少し楽しそうに聞こえた。そして、今やすっかり人の欲を知ることのできる能力を持った神子さまには、なおさら男の意地の悪い喜びが読み取れるのだった。

しかもそのような神子さまを見て楽しんでいる人間は、一人ではなかった。その真つ暗な部屋には、何人もの男たちが、余興を楽しむようににやにや笑いながら座っているのであった。

「どっ…どうしても、ですか…？」

涙を浮かべ男を見上げる神子さまの顔は、やはりそれを見ることができる者がいたのなら、扇情的だと言われたかもしれない。

「はい。これを成し遂げられねば、神子さまは永遠に子どものままですぞ。大人にはなれませんが。」

それなら私は一生子どものままでいい…そう神子さまは思ったが、とても口に出すことなどできなかつた。

「どうしても口に入れられないというのなら、せめて舐めることだけでもなさってくださいませ。」

「…本当に、舐めるだけ…ですよ…？一瞬でもいいですか？」

「…仕方ありません、まずは一瞬だけから始めましょう。なあに、徐々に慣れていきますよ。」

そう言われ、神子さまは先程ひっこめた舌を再びそれに伸ばし…

「けっ…けしからん！なんだこの内容は！布都！いつの間にこんなものを書き加えた！二つ目の話にしてこんなものなんて、とても偉業集とは言えぬではないか!!」

「ああ、屠自古さま？おこんにちは。それを書きましたのは、私ですよ。」

「げげ、青娥!?!…どの。…青娥どのがこれを書いた、のですか?」

「ああ！我が少し二話目の構想を考えていたら、青娥どのに声を掛けられてな。いい『あいであ』があるというので、試しに書かせてみたら、思いのほか面白いものができたのだ！」

「こっ…こんな…こんなのが面白いというのか布都！悪趣味だ！悪趣味にもほどがある！…だいたい、こんな…こんな…神子さまは…」

「あらあら屠自古さま、お顔が真っ赤ですわよ?…どうかなさいましたのかしら、ねえ、布

都さまっ！」

「本当だぞ、屠自古どの。熱…なわけないな、お化けだし。」

「お化け言うな！…ではなくな、この話はあるまりではないか？だいたいこの偉業集は子どもから大人まで、あらゆる人間が読めるように作ると決めたではないか。」

「…ああ、屠自古どのはもしかすると、このような経験を子ども頃にしていないのか？
我はちゃんと子どもの頃に経験済みだから、ひどくも何ともないように思うのだが…」
「私も幼い頃に経験いたしましたわ。」

「ふっ…布都!?青娥はともかく、お前までそんなっ…!」

「ああ、今分かりましたわ。布都さま、屠自古さまは何やら勘違いなさっているようですわよ。これがどのような場面なのか、説明して差し上げて下さらないかしら?」

「む?屠自古どのがどのような勘違いをしているのか分からないが…一応説明するなら、神子さまが無理矢理…」

「いいっ!わざわざそんな口にするでないアホ布都っ!」

「あほ言うでない!」

「神子さまが無理矢理口の中に大嫌いなにんじんをねじこまれる場面を描いたものですよ。」

「…え。」

「本当は私もこの話を入れるべきか迷ったのだがな。そもそも神子さまに嫌いな食べ物があったかどうか知らないし。でも、青娥どのが『好き嫌いを克服すると偉くなれるという教訓になる』と言うから、採用したのだ。最初は子ども向けの話だと思っただが、最近では大人も結構好き嫌いをするようになったと聞いて、ますます入れねば思っとな。」

「…青娥どの。だが、この描写は少しばかり悪意がありはせぬか。」

「どこがですの?」

「確かに無理矢理嫌いな食べ物を食べさせられるのはかわいそうな話だが、小さい頃に直しておかねば大人になってからもっと大変な目に遭うからな。」

「…。」

「ねえ、屠自古さま?宜しかったら、この描写のどこが、どういうふうにな、どうして悪意があるように見えたのか、教えて下さらないかしら?今後の参考にもなりますしね、うふふ。」

「…布都どの。どうして青娥どのを巻き込んだ。」

「?」

それでもなおもそれを拒み続ける神子さまに、流星に男たちも折れ、とうとう部屋に明かりを灯した。

にんじんなんぞ見ただけでも鳥肌が立つくらいに大嫌いだった神子さまは、目の前にそれがあるのを見て、「ひえっ」と情けない声を上げてのけぞった。それから、大勢の部下の目の前にいることを思い出して、慌てて咳払いをして落ち着いたような顔をした。

だが、やはりにんじんは嫌いであった。

「やれやれ、神子さまのにんじん嫌いには困りましたなあ。にんじんが見えない真っ暗闇の中で食べさせれば、あるいはと思ったものですが。」

「いやいや、目に見えないほど細かく刻んでも食べられなかつたのですよ。それくらいのにんじん嫌いが、たかが真っ暗作戦程度で食べられるようになるとは思えない。やはりそなたの頭はがっかりのようですのお。」

「なんじゃとー！」

「そうおっしゃるそなたの『すりつぶして果汁に混ぜれば大丈夫作戦』だって失敗したではないか。」

「そなた、わしを馬鹿にしておるか。何も作戦を考えず、ただ文句ばかりつけるだけのそなたが。」

「そなたこそ馬鹿にしておろう?」

「そなた、やる気か?」

「喧嘩なら、上品に買おうかの。」

ああ、たかが好き嫌いのせいで。自分の好き嫌いの話程度で、臣下の間にまで何やら不穏な空気が漂っている。大変よろしくない。

「あなたたち、少し頭を冷やしていらつしやい。私も冷やして参ります。」

盛大な溜め息と共に、神子さまは部下をたしなめた。

神子さまのお声の効果は、いつだって抜群だった。この時も、その悩ましげな響きに、それまでびりびりしていた部屋の空気は一瞬で澄み渡り、静まり返り、臣下たちの顔は反省色に染まった。

部屋を出て、神子さまは自室へと向かわれた。そうしてまた、悩ましげな溜め息をつきながら、そつと庭に目をやった。

すると、いつもの庭と少しばかり様子が違うのが、すぐに分かった。

見知らぬ白いうさぎが、いた。

その毛皮は可哀相なことにずたずたに引き裂かれており、息も絶え絶えであった。

「うさぎ…？ いったいどうしてこのようになったのですか？」

「別にわにをからかったわけじゃないうさ。あんたの臣下が意味もなく私をいじめたんだうさ。私は偉いうさぎうさ。このまんまじゃ死んじやううさ。あと、なんか天罰下るうさ。さあ、どうするうさ？」

神子さまは瞬時にうさぎの欲を読み取った。

うさぎの欲は、「にんじん食べたい」だった。

「怪我を治すのには、何よりもまず、栄養をつけねばなりませんね。確かうさぎはにんじんが好物だったと聞きます。それににんじんには栄養もある。あなた、にんじんを食べるくらいの体力はありますか。」

「あるうさー。」

うさぎはとても元気そうに言った。ただし、怪我は本物である。別に神子さまを騙していたわけではないのである。

うさぎににんじんを与えると、うさぎは美味しそうにもぐもぐと食べ始めた。ただ、怪我がすぐに治るわけではない。うさぎは長期間に渡って神子さまのお庭に居座り続けた。その間毎日毎日 にんじんを食べ続けた。美味しそうに美味しそうに、にんじんを食べ続けた。

うさぎが居座り続けてから数か月後。すっかり傷も癒えたうさぎは、ある日神子さま

にこう言った。

「神子、私はもう元気になったうさ。もうそろそろこんなところおさらばしたいうさ。その前に、一つお前に幸せをあげるうさ。何を隠そう私は幸せを運ぶうさぎだったのうさ。神子。お前はもう、にんじんが食べられるようになってるうさ。」

そう言つてうさぎはおもむろに、手元に置いてあつたうさぎ用のにんじん入れかごから一本にんじんを取り出し、神子さまに手渡した。

「え……？」

そう言われて、神子さまは初めて気づいた。うさぎを最初に見た日ほど、にんじんに嫌な気持ちを抱かない。それどころか、なんだかそれがとても美味しそうなものに見える。

ぱくり。恐る恐るにんじんをかじってみる。少しばかりくせのある香りがしたが、想像していたものほどきつくない。根を食べる種類の野菜は土臭いという印象があつたが、そちらのほうもごぼうなんかに比べると全然土臭くもない。そして何より、甘かつた。にんじんが甘くてこんなに食べやすいものだなんて、知らなかつた。

ああ、そうか。神子さまはやつと気づいた。毎日毎日うさぎが美味しそうににんじんを食べる姿を見て、少しずつだが、にんじんは美味しいのかもしれない、無意識のうちには思い始めていたのだ。

「ありがとうございます……！」

神子さまがそう声に出して言った時には、すでにうさぎは姿を消していた。

その翌日のお食事の際に、神子さまが澄ました顔でにんじんを食べているのを見て、それまで神子さまににんじんを食べさせようと頑張っていた臣下たちは、皆ぼかんと口を開けた。

「み……神子さま、いつの間になんじんが……!？」

「うさぎが私ににんじんの美味しさを教えてくれたのです。それに比べてあなた方は、何もできなかった。あなた方は動物以下の存在なのです。そのような何の仕事も出来ない人間が政に携わってよいことなどあるはずがありません。」

こうしてうさぎによって、心優しい神子さまはにんじん嫌いを克服し、性格が悪く世の中を悪い方向へと導いていた悪い臣下たちは、政治の場を追われたのであった。

めでたしめでたし。

例の物語プロジェクトに青娥どのが加わったという恐ろしい声を聞き、慌てて屠自古の部屋へとそつと忍び込み、例の本の隠し場所を探った。

考えていた通り、序盤はろくなことになっていなかったが、これでもまだ可愛らしい

方だ。全然恐くない。何せ、青娥どのの本気と来たら……いや、思い出すだけでも恐ろしい。

読み進めてみて、ろくなことになっていないのは序盤だけではないということが分かった。何これ。期待して読み進めた書物が、最後は夢でしたとか、敵は皆爆発しましたとか、そんな手を抜いたような展開で唐突に終わってしまった時みたいなの、正に、手抜き感。っていうか、はつきり言つてパクリ。

つつこめるところも色々あるよ？当時の我が国ににんじんなんて、まだなかったからね？あと私、にんじん嫌いだった時期なんて一つもないよ？嫌いな食べ物とか、少しある程度で、例えば緑の……いや、やめておこう。

とにかく、序盤のあの描写のことを考えると、こんな書物を世間に広めるわけにはいかない。何よりも、私の名誉のために。そう思い、私は書物の二話目のページを全て破り取った。

ごめんなさい、布都。あなたは悪意があつたわけではない。ただ人選が悪かつただけ。屠自古。あなたの抱いたちよつとけしからん欲は、見なかつたことにしておいてあげます。青娥どの。あなただけは許したくないけど、あなたつて悪気なく悪いことをする人だから、今回も悪意があつてこれを書いたわけでもないから、きつと罪悪感もないのでしようし、だから叱つたところで無駄になることは分かっています。

∴結局損をしているのは私だけな気がしてきた。ああ、後はこの物語の「うさぎ」によく似ているあの妖怪も、少し損をしているような。でも、このうさぎ、中々に美味しい役な気もする。描写はアレだが。

ページを燃やしてしまうと、私はやつと安心したような気持ちになれた。ああ、これでいい。布都や屠自古には申し訳ないのだけれど、悪いけど、二話目はやはりなかったことにして、もう一度全く違う感じの話を作り上げて欲しい。青娥どののこれだけは、ダメだ。

その時だった。

「ふふ、残念でしたわね、神子さま。」

「!？」

慌てて振り返ると、そこにはふわふわと宙に浮く青娥がいた。あの、一見無邪気で純粹そうな笑み。嫌な予感がした。

青娥どのは普段、にやにやと何かを楽しんでいるような悪意ある笑みを浮かべることが多い。でも、そういう時は大抵被害は少なくて済む。逆に、こういういう純粹な笑顔を浮かべている時ほど被害が大きい時はない。∴ああ、もう、最悪だ。

「すでに写しはとつてありますのよ。それだけではありませんわ。すでに数名人里の者に見せて、感想を聞いておりますの。皆、大喜びで読んでおりましたわ。」

サーツと血の気が引く音が聞こえたとは、まさにこういう時のことを言うのだろう。「大勢の紳士の集う場所、カフェーにも一冊、写しを置くように頼んでおきましたの。きつと良いコーヒーのお供になりますわ。それから、紅の館の図書館や森の蒐集家……うそう、貸本屋にも置いておきましたのよ。営業つて、案外楽しいお仕事ですね。」

…もう、最悪。

その三、ふつうはだいたいこんなふうに通じす

むかしむかしあるところに、神子さまという大変偉くて高貴な方がいらつしやった。

さて、これまで神子さまの特別なエピソードを書き連ねてきたが、逆に、当時の神子さまの毎日がどのようなものであつたか、説明しよう。

まず朝。だいたい四時くらいに目を覚ます。神子さまは夜も遅いので、それにしては早起きである。でも、仕方のないことであつた。というのも、神子さまの朝の起き方と云つたら、たいていどこかの誰かのくだらない心の叫び声で起こされるのが定番だつたからである。人間の読者の皆様からすれば、そんな毎日毎日叫ぶ人間なんていないだらうと思われるかもしれない。だが、いるのである。しかも、けつこうたくさん。

ましてや神子さまのお住まいには、従者的なポジションの人間も結構いたわけで、毎朝数人は叫んでいたのである。寝ている間に突然、「火事だー……つて叫んでみたいな、てへっ」みたいな声が聞こえてきたら、即起きて殴るか蹴るかしてから再度床に就きたいものを、神子さまは毎日我慢しているのである。さすが神子さま、偉い人。

まあ、午前中には御前会議などを行う。……いや、本気よ？冗談とかじゃないのよ？で、まあだいたい午前十時くらいになると、周りの人間の食欲が聞こえてくる。早い人間だ

と、もつと早くから「腹減ったー」とか言い出すのだけれど、たいていは十時ね。そういえばヨーロッパの方々がお茶をするのも、だいたい十時くらいだけれど、やはり十時にお腹が空くのは万国共通みたいね。

でも、いくら神子さまでも臣下全員におやつ…とは正確には違うのかもしれないけれど、まあおやつね、要は小腹を満たすようなものをあげるわけにもいかないものだから、昼食（つっていてもそれこそ本当に軽食レベルだったらしいわね）の時刻まで「腹減ったー」を聞き続けなければならぬ。昼食を終わらせて間もなく、また「腹減ったー」が聞こえ始める。まったく、人間って食欲にまみれてるのね。嫌だわ。それから、昼食の後には、「チョー眠い」も聞こえてくる。腹が膨れれば次には眠くなる。当然だけれど昼寝も許されないことだから、その声もしばらく聞こえ続ける。ただ、「腹減ったー」に比べると、幾分かマシね。これは動いているうちになくなってくる人間も多いようだから。

軽食を終えると、再びお仕事。仕事している最中にも、本来ならあつてはならないような欲が、たまに聞こえてくる。「一個くらい盗っても」なんて、よく聞こえるもの。ただ、たいていは心の中で思う程度の欲で終わってしまうのだけれどね。それから、特に春あたりに聞こえてくるのが、「あの姫君はお美しいな」とか、「あの殿方は凛々しくていらつしやる」なんていう、呑気そうな人々の声。時々昼間から「いちやつきたいなあ」なんて欲が聞こえてきた日には、耳を塞ぎたくなるものだった。…まあ、事情に明るく

ない者の前でそんなことをしてみれば、頭痛か、眩暈か、はたまた見えぬ声が聞こえる俺に近づくな敵な意味の例の病か、などと言われるから、それもできない。苦痛な昼下がりにある。

夕飯が終わる頃にもなると、すっかり陽も落ちる。この頃は夜は妖怪の時間であったし、人間は陽が落ちたらすぐに床に就く…のだったが、床に就いたからといってすぐに眠れるかというわけでもない。

だって、神子さまの耳には、あつちの部屋で臣下が酔っぱらって愚痴を言い合っているのとか馬鹿騒ぎしているのとか、はたまたそつちの部屋で男女がよろしくやっているのとか、色々しつかりはつきりと聞こえているのだから。

神子さまも、強くなつてしまった能力に慣れることができなかつた最初の頃こそ、寝酒でもしてみたのだが、残念なことに寝付きは良くなるものの眠りが浅くなつてしまつた。寝言のちよつとした声でさえ、起こされてしまう。そんなものだから、神子さまは実は、常に寝不足だったのである。ここで誰か神子さまに膝を貸してやる人物がいればよかつたものを。一晩中静かな眠りに就かせるために、耳を塞ぎ続ける者を置いておけばよかつたかもしれない。あるいは…隣に誰かを寝かせ、その心音を聞き続ける、とか。ああ、でもそれじゃあやはり、「その者」の欲が神子さまの眠りを妨げてしまうか…。

と、そんなわけで、神子さまの寝苦しい夜は続き、やっと眠れたかと思つたら、すぐ

に朝一番早い者の心の声が聞こえ始める。

まあ、つまり、今回のお話を一言で記すなら。

神子さまは常に寝不足だったのである。

めでたしめでたし。

「ふむ、寝不足つ子の太子さまもなかなか良いものだな！ こういうのを萌えというのだろうか！ 青娥どのが言ってた！……って、そう言えば、今日は青娥どのはおらんのか？」

「ああいうのを二連続でやるとさすがにヤベえだろ！……コホン、今日は、件の本を読みなされたとある方が筆を取ってくださいました。」

「……こんにちは。」

「あ」

「『ああ、さとりどのだったか、こんにちは。しかしどうしてよりもよってさとりどのが？』ええ、解説しますわ。神子さんと私の能力は似たようなもの。たぶん、神子さんのお気持ちを幻想郷で一番理解しておりますのは私ですわ。喜びも、苦悩も、それから好みも。……屠自古さんツッコまないで下さい。もちろん神子さんは表面上はすごく利発で落ち着いていらつしやるように見えますわ。でも、その心の奥深くには、バ……一般

的な者には見えない、暗くて誰も照らすことのできない闇があるんですよ。ええ、分かります、私には、分かるんです、だって私と神子さんは、似た者同士、同じく陽の光を浴びながら…そのツツコミも野暮ですわ…絶えず人の心の闇を見つめ、それに引きずられし者。もちろん、私だってお日様じゃないわ。だから神子さんの心の闇を明るく照らすことなんてできない。でも、心の奥底、陽の光ですら届かない、深い深い場所まで一緒に堕ちていって、その寒くて寂しい場所に一人でいる神子さんにそつと寄り添うくらいは私にもできるの。生半可に一人でいると、上がるべきか留まるべきかで迷うものを、二人でいれば、なおさら闇に堕ちていくことさえできる。ええ、翼なんて、例え持っていたとしても捨ててかまわない。もともと持つていないのなら、元から捨てるものもないのよ。堕ちていきましよう？二人で、闇の奥底まで。そして一番深いところまで辿りついて、さらに闇を極めて、二人っきりの世界を作り上げてもいいんじゃない…つてあなたたちなんですそのリアクションは。…いいわ、台詞は奪いません。あえて口に出して下さい。じゃないと私の一人芝居じゃないですか。」

「…なんというか、その、さとりどのは表現力がすごいな。」

「我は普通にロープを垂れ下げて神子さまを引っぱり上げる派だな。」

「なんですつて!? 屠自古さん、あなた今『まあ、こんな敵にもなるまい』とか心の中で鼻で嗤いましたね?! いいわ、それじゃあ今すぐ神子さんの心の中を覗いて、誰が好きな

のかをはつきりさせてくるわ！最近神子さん、私にもすつごく優しいのよ！能力的にも近いからって仲良くしてくれてるの！絶対に！絶対に私の方が好きなんだからっ！」
「おう！覗いてくるがよい！どうせ屠自古どのに僅差で我が勝っているのだからかな！」

「やつ…やめ…大体そういうのは告白されて嬉しいものだろう！自分から知って何が楽しい…！そつ…それと、神子さまは、その、さとりどのとか布都よりも…わ、私のほうが…」

「あなたの方がなんですつてえ？ああ、聞こえますよ聞こえますよお、あなたの心の声。言つてあげましょうか？ええ、言つてあげましょうか？今、大声で、布都さんのものよりも少しばかり悩ましくも愚かしい色の濃いあなたのその心を！」

「…屠自古どの、おぬしの心の中つてやましいのか？」

「ちつ…違う！私の…私の純粋な…想いを、邪心扱いするな阿呆っ！」

「あほ言うなっ！」

「見える、見えますわっ！」

…。

…どうして、こうなつてしまったんだろう。確かにさとりさんの住む地霊殿には、

時々遊びに行くようにはしていた。だが、さとりに抱く感情はあくまで同情だし、彼女に「そういう想い」を抱かせるように行動やら発言やらした覚えはない。…こういうの、なんて言うんだっつけ。そうだ、天然たらし？私つてばもしかして天然たらし…？

それにしても、あのさとりさんの様子。幸いなことに今は布都と屠自古が抑えていてくれているが、もしかしたら、そのうちするりと抜けだして私を探しに来るかもしれん。そうなると、少々厄介だ。あの手のタイプが、もし片想いであることに気づいてしまつたら…まあ、運が良ければストーカー化されるだけかもしれないが、運が悪ければ丑の刻参りだ。そういうのは、決して対処できないわけではないが…だが、あの人が呪われてしまうのは、対処できるとはいえ、やはり嫌だ。

それに何より…あの様子だと、この胸の内を何から何まで暴かれてしまいそうだ。誰にどのような感情を抱いているか、特に…この好意を、誰に寄せているか、をな。さすがに私もそれは少しばかり恥ずかしいし、それに、明かしてしまつたら布都や屠自古との関係も、恐らく今までのものとは変わるだろう。二人にわざわざ気を利かせるような真似をさせるのも悪いし…いわゆる、「今の関係が変わっちゃうのが怖い！」つてやつだ。そういうところは私も普通の少女らしさを持つているのかな、なんて思つてしまふ。

…まあ、その、なんだ。仕方ない。少しばかり、姿を隠すことにするか。